

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

還暦を過ぎて最近思う事など

一言志四録ふたたび

関西支部長 安部川 信 (昭50年卒)



40年ほど前に卒業し、電力時代も含め洛友会にあまり貢献した記憶もないにもかかわらず本年度関西支部長の榮譽に預かりました。昭和50年学部卒、52年大学院修了、学部は卯本先生、修士は西川先生のご指導を受けました。この原稿を書き始めようかと思いはじめていた時、卯本先生の突然のご訃報に接しました。驚きと共に悲しみで一杯でございます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私は現在、新関西国際空港と言う関空と伊丹の両空港を運営して

いる会社に勤務しております。思えば、関電時代もいろいろな仕事に携わりそれなりにダイナミックに動いていたつもりでしたが、全く業容の異なる分野に触れさせて頂き、還暦直前での異動でしたが、改めて自身の会社人生の不思議さに瞠目させられたものでした。

今まさにアジアの空は世界の注目の的であります。中国、東南アジアを中心に物凄い勢いで成長しています。開港当時から勤務されている人たちに取りましたが、今までの経験や実績からは予測もつかないスピードで動いておりその速さと変化に圧倒されるばかりのようです。そんな中、関空はいわゆるコンセッション(運営権の売却)、伊丹はそれに加えてターミナルビルの大改修に入っております。まさに、関西のゲートウェイの只中で世界のアジアの胎動を実感しております。詳しいお話は11月の「京都大学電気系懇話会」にてお話しする事になっておりますので、ご興味のある方は是非お越し下さい。

さて、思えば昭和52年関西電力に入社し変電所の設計業務などを皮切りに実にさまざまな経験をさせて頂きました。入社後10年あまりは、工務部門にて主に送電線や変電所の将来系系統を考える計画部門に身を置き、40歳の時に電気設備全般並びに系統の運用を統括する部署の長として関電京都支店へと異動となりました。学生時代6年間を過ごした京都の地、しかも、JR京都駅前にある旧京都電燈本社ビルの面影が色濃く残る老舗支店での勤務となりました。ここでの3年半ほどの勤務は大変思い出深いものであります。

イベントの大きなものでは、当時、管内にあり事業用水力では日本で一番古い蹴上発電所がちょうど100年目を迎え、大々的に記念イベントを開催し、その実行委員長としての立場で忙しく立ち働いた事を懐かしく思い出します。

会報のメール通知サービス 登録受付中

「印刷された会報は要らない。パソコンで読む。環境保護に協力する。」という会員の皆様に、会報の発行をメールでお知らせするサービスを開始しました。

ご希望の方は、「会報メール通知希望」とお名前を 洛友会 e-rakuyu@kuee.kyoto-u.ac.jp でお送りください。

合わせて、技術広報誌 cue のメール通知サービスも受け付けております。

盛況でありました。また、100年の歳月を重ねた水力発電機と対比する意味で当時、岡田先生にご無理を申し上げて、超電導発電機を3日ほどのイベント開催期間中に回して頂きました。開催前夜「なかなか上手くまわらんぞ」と岡田先生がねじり鉢巻きで奮闘されていたのを今も思い出します。

また、この時に展示物として、京大の電気教室の片隅に眠っていた、スタンレーの発電機を貰い受け、綺麗に錆を落としとして展示しました。この発電機は今でも、関電京都支店の玄関に入った右手に展示していたかと記憶しております。

その後宇治発電所の80周年イベントなどを開催し、疎水にまつわる楽しい京都時代の思い出は尽きません。ただ、当時は京都のいろいろな場所で建設しようとしていた変電所が悉くと言うと大袈裟ですが、地元の反対に会い難航しておりました。また、現場工事中に大変残念ながら協力業者さんの死亡災害事故が発生したりとマイナスマ面の思い出もいろいろございました。

しかし今になってみますと楽しいお話もさる事ながら、難しかったり苦しかったりで苦勞したお話の方がむしろ懐かしく思い出されるのは不思議であります。

この京都時代が正に40歳前後、所謂厄年の時でありました。そこである業界紙の巻頭言を頼まれた時、思い立ち、「厄年に思うことなど」と言う雑文を寄稿致しました。中身は主に当時傾倒しておりました安岡正篤氏の受売りと佐藤一斎氏の「言志四録」でありました。当時、機会を得てひと月の休養期間を頂きました。勿論、家族サービス等もいろいろやりましたが、その中で一つ自分に課したテーマが「言志四録」でありました。前々から大きく2つの観点でこの書に興味がありました。その一つは、今も電気・電子回路でこの著書が残っております東工大の学

長も務められた川上正光先生が、講談社学術文庫から「言志四録」4巻の現代語訳を出されていた事。もう一つは、西郷隆盛が1133条ある語録から101条を抜き出し「西郷南洲遺訓」を表した事。と言う訳で当時、川上先生のご本を読み込み、私なりの百条を抽出したものであります。

例えば「得意の時候は、最も当に進歩の工夫を著くべし。一時一事も亦皆九龍有り」本当「盈つれば欠ける」であります。易経の「九龍悔い有り」です。もう一つ「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら慎む」。

何かこれらの箴言に接したからか、先ほど申し上げた死亡災害等のつらい試練も乗り越えられたように思われます。

南洲遺訓の選とどうであったかは敢えてここでは申し上げませんが、その時は、一斎が40代で言志録を60前後で後録を70代で晩録をそして80代で蓋録を表したのだからもう一度60歳になったら百選をやるかと堅く誓ったものであります。ただ、残念ながら未だその誓いは達成されておりません。

この寄稿のご依頼を頂いたのも支部長をお受けした事も何かの良縁と思ひ、還暦から3年近く経ちましたが改めて当時の誓を達成しようかと考えております。

京都支店の後は、本店のR&D部門に1年ほどその後神戸の震災の応援で神戸に1年。いずれも貴重な知見と人脈を頂きました。その後、現在のグループ経営本部の前身であります戦略チームや企画部門、新設グループ会社の役員、原子力部門で福井嶺北の地とめぐるしく異動し、現在の前職で再び京都支店へ支店長として赴任致しました。

支店長時代は、節電や原子力といった苦労も勿論ありましたが、経済団体の集まりやロータリークラブなどで京都の諸先輩の皆さま方に可愛がって頂き、また親しくお付き合いさせて頂きました。あつと言う間の3年間を過ごさせて頂きました。課長時代とは別の意味で改めて京都の奥の深さの一端を垣間見た気がいたします。

例えば、神戸西宮に住み、主に会社人生は大阪で勤務。学生時代を含め人生の5分の1程度を京都の地で過ごした私ですが、関西で過ごせた事を改めて感謝しております。

どなたかがおっしゃっておりますが、東京はアメリカみたいに同質の大都会が複数集まった都市。一方、関西はヨーロッパのように個性の異なる国々の連合体と。現職の新開空会社での仕事におきましてもこの魅力ある関西を

バックに地域と共に益々発展して参りたいと考えております。特に京都は文化の宝庫。旧制高校が出来たとき、もしかしたら大阪に行ってしまったかも知れない三高(京大)がよくぞ京都の地におっしゃられておられるように、明治の疎水事業と三高の誘致は、

遷都1200年あまりの歴史を持つ京都のあまたある近年の大事業の中でも特別なシンボルだと。皆さまも是非お時間を作り、青春時代を謳歌した京都の地を訪れ、その素晴らしさを味わって頂きたいと思ひます。

平成27年度 懇話会 開催のご案内

在校生(学生会員)と卒業生(正会員)の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、改めてお知らせいたします。是非ご参加ください。

記

日時：平成27年11月6日(金) 14時30分～19時30分
場所：吉田キャンパス電気総合館 大講義室

懇親会：生協北部食堂2階
プログラム(予定)：

- 14時30分 開会挨拶(電気電子工学科科長 引原隆士 教授)
- 14時40分 「ものづくりに思う」
- 15時30分 中村行宏先生(京都大学名誉教授)
- 「天気と電気を仕事に! Interdisciplinary Research and Development for New Business」
- 手柴 充博氏(株)ウェザーニューズ レーダープロジェクト プロジェクトリーダー オクラホマイノベーションセンター センター長・平11年卒)
- 休憩
- 16時20分 「関西国際空港におけるエネルギーシステムについて」
- 16時30分 安部川 信氏(新関西国際空港(株)専務取締役、昭50年卒)
- 18時00分 懇親会(生協北部食堂2F)
- (会費：社会人3,000円、学生 無料)

会員寄稿

若山 暢博

(平13年卒・東京支部)

私が京の都で学生生活を過ごしたのは、ちょうど20世紀最後の6年間でした。よき先生方、先輩方、仲間達に恵まれ、充実した日々を送ることができたことを、恐れながら紙面をお借りして御礼申し上げます。

さてそれ以前の高校を卒業するまでの18年間、四国は香川県の西の端にある観音寺市というところで私は生まれ育ちました。ここでは誠に勝手ながら私のふるさとについて少し紹介させていただきますと思います。

まず「観音寺」の読みですが「かんのんじ」や「かんのうじ」とも読めますが、私のふるさと「観音寺」市は地名としては「かんのんじ」と読みます。西は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈、海と山の間には三豊平野が広がっています。香川県は瀬戸内海式気候で雨が少なく、また大きな河川が少ないため、古来よりため池が多くつくられてきましたが、三豊平野にも多くのため池があります。飛行機での上空からの眺め、また某地図サイト等でその地勢をご覧いただけ



銭形砂絵「寛永通宝」

れば、雨上がりの水たまりのよう
に多くのため池が見られるかと思
います。

海岸は遠浅の砂浜で有明浜と呼
ばれていますが、そこには銭形砂
絵「寛永通宝」があります。それは
東西122m南北90m周囲345m
もある有明浜の白砂に描かれた巨
大な砂絵で、琴弾公園内の山頂展
望台から見るときれいな円形に見
えるようになっていきます。いつ、
だが、何の目的でつくったか
については諸説あるようですが、一
説には寛永10年（1633年）に
当時の藩主、生駒高俊公を歓迎す
るために一夜にしてつくられたと
いわれています。穏やかな瀬戸内
海を背景に、白砂と青々とした松
林が見える山頂展望台からの眺望
はみごとなものですので、もしお
近くに立ち寄る機会がありましたら
、足を延ばして一目ご覧いただ

くことをお勧めします。

その展望台のある山頂には琴弾
八幡宮という神社があります。佐
渡ヶ嶽部屋という相撲部屋があり
ますが、所属されている力士の方
は「琴」という一字が頭に付けら
れた四股名を名乗られています。
これは11代佐渡ヶ嶽のふるさとの
縁ということで、この琴弾八幡宮
に由来していると聞いています。

ふるさとを離れて初めて気付く
事柄というのも多いと思います
が、そのひとつがふるさとの言葉
、いわゆる方言ではないかと思いま
す。私もふるさとを離れて生活を
して初めて今まで使っていた言葉
が、ふるさとの言葉であることに
気付いたものです。私が気付いた
恐らく讃岐地方の言葉であるうと
思われるものをいくつか紹介した
と思います。

ひとつは「お腹(なか)がおきる」
という表現です。これは食事等を
してお腹が満たされる、お腹が
いっぱいになるという意味です。
友人たちと一緒に食事をしてい
て、料理の追加注文が必要かどう
かを皆に確認する時など、私など
は「もう、お腹おきた?」とつい
つい聞いてしまうものです。一方
で逆に空腹のときには「ねる」の
かとよく聞かれるのですが、(残
念ながら?) そのようには表現し
ません。

もうひとつは「まける」という
表現です。これは「こぼれる」と
いう意味です。お酒の席等で、例
えばビールなどをグラスに注いで
いただく際、注ぎすぎてグラスか
らこぼれそうになると思わず「ま
ける! まける!」と私は叫んでし
まいます。

「むっこい」という表現もあり
ます。これについては個人的には
他に的確に表現する言葉がなか
か見当たらない気がしますが、「あ
ぶらっこい」や「くどい」に近い
意味合いと言われています。

さて、ふるさとといえば慣れ親
しんだ、または懐かしい郷土の食
べ物、料理があるかと思えます。
香川県といえば、まず皆様が思い
浮かべられるのは「さぬきうどん」
ではないかと思いますが、ここで
はお正月にいただく私の大好きな
「あんもち雑煮」をご紹介します
と思います。雑煮は地域による違
いが比較的大きい料理と思いま
すが、「あんもち雑煮」は白みそが
ベースで丸い餅と大根、人参がは
いっています。特徴的なのは丸い
餅にはあんこ(我が家はこしあん)
がはいった、いわゆる「あんもち」
を用います。「あんもち雑煮」を
初めて知る方々は、その組み合わせ
に大半の方は驚きと、少なから
ず拒否反応をお持ちになるので
はないかと思えます。好き嫌いは

分かれるところかもしれませんが
が、意外に合う絶妙な組み合わせ
ですので、特に甘党の方は、もし
機会がありましたらご賞味いただ
ければ幸いです。

とりとめのないふるさとの話を
書いてしまいましたが、大学への
進学、その後の社会人になってか
らの生活で、気がつけば既にふる
さとを離れてからの人生の方が長
くなりました。思えばこれまで多
くの方々に支えられ、助けていた
だきながら人生を歩んできました。
た。あらためて多くの方々に感謝
するとともに、少しでも皆様に恩
返しできるように、今後もしっか
りと歩んでいきたいと思えます。

アドバイックスと私(その4)
若い社員が力を発揮するために
経営者のやるべきことと
酒井 和憲
(昭55年修・中部支部)



「アドバイックスと私」という
タイトルで2008年から3年連
続、若い人に向けて書かせていた

だいたが、それ以降、社会的変化
とともに当社も大きく変わった。
今回は、ここ数年の経験をもとに、
管理職の方にも向けて書かせてい
ただくことにした。

リーマンショックによる赤字、
トヨタの大規模リコール、東北大
震災、タイ大洪水など想定外と思
われるような経営危機が毎年およ
うに起きた。経済面では新興国が
急成長を続けて車の販売が大きく
伸びる一方、先進国の車両台数は
横ばいになった。技術面ではクル
マ単体で見たFuel Driveや環境・
安全に加えて、電気自動車・ハイ
ブリッド車・水素燃料電池車とい
うエネルギー政策から、社会・モ
ビリティ全体の中の一段として
クルマを考えた「カーシェアリン
グ」というビジネスまで、昔は夢
だったことが当たり前に語られる
ようになった。自動ブレーキによ
る衝突防止のCMが目立つ。そし
てGoogleにより近々始まる自動
運転の公道試験では、地域の人々
の受入れ方も重要な調査項目に
なっている。まさにクルマの100
年の歴史を上回る変化である。

当社は自動車用ブレーキシステ
ムの総合メーカーを目指し、アイ
シン・デンソー・住友電工3社の
ブレーキ部門を集約、開発と販売
を担って2001年に設立。トヨタ
自動車の拡大とともに順調に成

長し、とりわけ、ハイブリッド車専用の制動時にエネルギー回生が可能な電子制御ブレーキシステムで、世界に先駆けた。しかしリーマンショック後に状況は一変。国内の需要は大きく減少し、グローバル販売でも欧米の巨大企業他社に大きく遅れを取った。しかも親会社が生産を担っていることで思い切った海外投資の決断ができない状態だった。

2009年に、アドヴィックス設立当初から深く関わっていた川田がアイシンから当社の社長に就任。市場環境は、新興国の拡大とともに環境・安全面で製品が大きく進化しており、当社としては保有する技術と受注・生産の結合が大きな課題だった。継続的に成長発展するために「自ら決断し、自ら投資する自立した会社」になるべきと判断。トップダウンにより生産工場を譲り受け、役員体制変更と人材転籍を皮切りに、開発・生産・販売が一体となった、いわゆる普通の会社に変革したのである。

新製品の開発計画を「グリーンプログラム」、世界シェアを確保する販売計画を「グローバルプラン」として全社で共有、全世界で29拠点となり、2017年6000億円の販売目標に目処がついた。

若い人が思い切った仕事をする

ためには、まず経営者が変わらなければいけない。そこで、TQM(総合品質管理)担当の役員である私が提案して、出身の異なる役員が価値観を共有するために、製品毎の歴史と今後を議論した。お客様、競合他社、製品、各部署(設計、営業、生産)の行動の観点で年表化し、お互いの考え方を説明しあった。すると「ターニングポイント」が分かってきた。全体を知る人は意外に少ない。当社のように、もともと競争相手が合体した会社では尚更だった。時に第三者を招いての議論で互いの前提条件から食い違う場合もあることに気づく。過去のターニングポイントを共有すると、相手の考え方や時流の変化を認めたらうで「アゲ」どうするべきかという議論に移行できた。

若手の早期育成と中堅の指導力向上を狙って、各部署で実施される小集団活動の部内発表会に、私も目立たないように参加して、どんな人がいるのかを知るように心がけた。

設立時から親会社の情報システムを借用していたが、会社の自立化に合わせてデータを活用するためには情報システムの自立化が必須だった。これはシステム全体を構築できる千載一遇のチャンスであり、最新技術を導入した。シス

テムは役員・全部署に関わるため、その構築を通して会社の仕組みを理解・共有する人材育成にも活用した。

大きな変革と持続的な成長を目指すためには、価値観を合わせることに、一人ひとりをよく見るのが重要だ。マネジメントの語源は手綱を取ることでさうである。手綱は命令とは違い、心を通わせるもの。組織が変化していく時こそ、人の強さを引き出さなければならぬ。当社は技術と生産を除いたマネジメント組織の大きさが、ちょうど1フロアの顔が見える規模である。人と組織が持つ強さを引き出す準備として観察する必要がある。前述の工夫で共通することは観察の仕掛けであった。

- 1) 観察者のために相手に負担をかけてしまうと見せてくれない
- 2) リスペクトがなければ見えない
- 3) 観察者自身に目的があれば何が生み出される

京都大学総長に昨年就任された山極教授からゴリラ研究の話をお聞きしたが、同じ霊長類の人間にもびたりとあてはまる。大学が大きく変革する時に総長に選ばれた方と、私の方法論に似たところがあり、大変心強く感じた。

当社の例は、経営や社員の働きぶりに関する基本が表れていると

思う。若い人が非常に多く、新たなビジネスの舞台で彼らが力を発揮できるかどうか、まさに経営者の腕の見せ所。リスクもあるが、今後大いなる楽しみである。成功体験の中で自信が付き、成長していくことを期待するものである。

参考文献・品質月間テキスト408
「株式会社アドヴィックスの自立への道」川田武司著 2015年10月1日発行予定(日本科学技術連盟)

全国中学生空手道選手権大会

田嶋 真一

(昭53年修・四国支部)



私は、本年3月香川高等専門学校を退職し、年金生活に入りました。香川高等専門学校は、平成21年10月に、高松工業高等専門学校と、詫間電波工業高等専門学校を統合・再編してできた高専です。このうち、詫間電波高専は、田中哲郎先生が校長を勤められた高専としてご存知の方も多いかと思

ます。

私は、実は空手に関しては門外漢ですが、平成元年に、詫間電波高専空手部の前任顧問であった兼田雅弘(昭42年修・昭45年博)先生から顧問を引き継いだらすぐに、当時の部員から中学時代に空手を教えてもらっていた先生に指導に来ていただいてもいいだろうかと相談を受け、小西治良先生(現香川県空手道連盟副会長)のご指導を受けるようになりました。さらに、香川県空手道連盟に団体として加盟することになりました。それ以来四半世紀にわたって、香川県空手道連盟にお世話になってきました。

さて、表題の全国中学生空手道選手権大会は、(公財)全日本空手道連盟および全国中学校空手道連盟が主催する、参加選手約1、200名規模の大会で、今年度で第23回を数え、8月21日(金)・8月23日(日)の間、香川県高松市総合体育館で開催されることになりました。ある意味では、50年に一度のビッグイベントともいえるかと思えます。私も大会実行委員会の委員として参画することになりました。このような大会に裏方として参画された経験をお持ちの方は少なからず居られるとは思いますが、この経験をご披露させていただきます。

平成25年度に、平成27年度第23回大会香川県開催の決定を受けましたが、もちろん香川県空手道連盟にとっても初めてのことでしたので、長野県で開催された第21回大会の視察が行われました。

この視察で得られた大会運営に関する知見をもとに、平成26年度にリハーサル大会として、第4回四国地区中学生空手道選手権大会と、小学生を対象とした第1回四国地区少年少女空手道選手権大会を開催し、大会運営に関する問題点等の洗い出しを行いました。その後、兵庫県で開催された第22回大会の視察が行われました。

大会まで残り1年を切り、スタッフの募集が始まりましたが、香川県空手道連盟に登録している選手の保護者をお願いすることも多く、1年後の予定が立たない等により、なかなか捗らず、役割分担を含めてスタッフ350余名が確定したのが、大会の約1か月前でした。

これに前後して、兵庫県からいただいた役割ごとのマニュアルの読み合わせや実情に合わせた修正等を行い、完成したものを基に、役割ごとの責任者が、登録団体の練習日に合わせて出向き、スタッフに説明し、周知徹底を図りました。

大会直前には、選手や審判等に

配布するプログラム・記念品などの袋詰めや、会場準備などがありますが、人海戦術でしか対応できないものでした。

いよいよ、8月21日の大会初日を迎え、役員・審判や選手団の受付や、開会式のリハーサルから、開会式も滞りなく終えることができました。その後、翌日からの試合に向けて各自役割分担を確認しながら、記計係のリハーサルを行い、万全を期することを目指しました。

続く22日には個人・団体の形競技と、組手競技の1回戦が、23日には組手競技の2回戦以降が行われましたが、選手が熱戦を繰り広げて、会場を大いに沸かしてくれました。運営面からは、ほぼオンタイムで進行し、胸を撫で下ろすことができました。

長野県および兵庫県で行われた前の2大会に比べて少しコンパクトな体育館でしたが、選手団からいい大会だったとの声をいただきました。

現在、国内外の空手道関係者は、「空手道は一つ！ルールは一つ！目指せオリンピック!」「[Karate into the Olympics]をスローガンに、2020年東京オリンピック・パラリンピックでの空手道正式種目化を目指しています。今大会に出場した選手や、残念ながら各都

道府県予選で敗れて出場できなかった選手も、今後の精進で2020年の東京オリンピック出場できれば喜ばしいことだと思っています。



福島にて（2011年）からの支援研究

上田 義勝

（平8年卒）

「だいぶゆれました。人生初。とりあえず大丈夫。」

（知人からのメール、2011、3/11）

2011年3月11日、地震直後に福島県にいる知人にメールを送った時はすぐ返事も来たので、これほど大変な被害になっている

とは思ってもよらなかった。その後14日からアメリカ出張を控え、その準備と刻々と変わる原発の状況は出発をためらわせるのに充分な状況だった。しかしながら、仕事でもあり大事な実験もあったので、いつもより薄暗い開空から、緊急帰国する米国の人々と一緒にアメリカに渡った。

アメリカでは行く先々で「I'm so sorry, are you and your family OK?」と道ばたでもどこでも訪ねられ、心配されていることがひしひしと伝わってきた。ただ、訪問先のオークリッジ研究所では放射線や原子炉の専門家が多数、日本の原発に関しては非常に冷たい視線を感じるが多かったが、様々な知見を頂きつつ、3月末に帰国した。

「職場は150名ほどの避難者がいます。生活状態は、徐々に改善されていますが、自宅はまだ、断水状態です。ガソリンも供給されません。

復旧にはもう少し時間がかかりそうです。とりあえずは、元気でやっていきます。まずは原発の沈静化を願っています。

すが、その後は、農家にとって、非常に厳しい現実が待っているようです。農業関係者としても、難しい問題に直面しそうです。」

（メール、2011、3/22）

帰国前にもらったメールが非常に気になり、時々連絡はしていたものの、これからどうしたらいいのか、何か手助け出来る事は無いのかをぼんやり考えていた。

2011年4月中旬に共同研究者の先生から、「放射能汚染土壌や水についての除去技術があるから、やってみようか。」という相談があり、急遽知人にメールと電話で連絡した。電気系の分野とも少し違い、知識もほとんど無かったが、アメリカにて中性子線を使った実験をしていた事もあるもので、何とかしたい、という気持ちがあった。福島県農業総合センターにいる知人に電話したところ、向こうは戦場の様な雰囲気だった。

「おまえ、こっちの現状がどんな感じかわかってる？」
 というもの気軽な調子ではあるが、かなり厳しい内容を色々聞いて、それでも共同で研究をやってみようという話になった。知人が心配でもあり、現状を確認すべく、

自費ですぐ福島に向かった。

「元氣？ひさしぶり。」(福島空港にて。2011、5/5)

普段なら観光で混んでいるはずの航空機チケットが簡単に取れた。機内はおそらく福島に戻る人でいっぱいだった。親子連れもいたが、マスク着用もあってかほとんど誰も話すことも無く、福島空港に着いた。空港まで迎えに来た知人とは、挨拶の他は何も言えなかった。農業総合センターに向かう道路は修繕されているものの、地震による起伏が残っており結構バウンドしたりしながらこれからどうするか、話をぼつぼつしていた。センターはまだ避難所になっていたが、100人近い人が収容されていたが、人気を感じられないくらい静かだった。二人して、センターの図書館で参考書を探し回り、農場を走り回って汚染状況などを確認しつつ、現状を実感したが、何より早く、解決方法を探すべきだと感じた。

「ポーランドは合気道も人気があるようだ。頑張ってきて下さい。」(メール、2011、6/29)

放射線関係について徐々に勉強しながら、学内で土壌を調べられ

る環境を作り、その対策も試行錯誤している中、別件でポーランド出張する事になった。知人とは、体育会の合気道部繋がりがあったため、ふと思いついて、ポーランドの「合気道鍛錬道場(Aikido tanren dojo)」に行ってみる事にした。早速道場の先生(Przemekさん)連絡したところ快諾頂いたが、ついでに別のメールも頂いた。

「I've noticed you're doing some research with polluted soil. My parents and father in particular does similar research at Warsaw Agriculture University.」

(Przemekさんからのメール、2011、7/1)

Przemekさんのお父さんも合気道を昔から続けているらしく、土壌汚染の専門家でもあるとの事なので、7月5日の夕方の合気道稽古に参加し、お父さんとお会いしながらいろんな話をしていたが、お父さんが「是非一度私の研究室に來なさい。」と勧めてくれるので、次の日の午後、ちょうど空き時間もあったので大学を訪問した。Przemekさんのお父さん(Stanislaw教授)とお母さんは大学で教鞭をとっておられ、土壌汚染に対する処理について、植物を使って実験

する研究室を持っていた。半日かけて研究室の見学と講義、ディスカッションをして、最後にポーランド料理をたらふくごちそうになりながら、合気道の話もしつつ、福島での処理をどうしたら良いのか等々を相談した。

「I collected almost all books which were printed so you can look for the title and I can suggest you which is valid to buy.」

(Stanislaw教授から、7/8)

翌日、もっといろんな話を聞きたいと思いつ、Stanislaw教授に何か役に立つ資料があったら何でも教えて欲しいとお願いした。返事はOKだったので、出張の用務を済ませたあと、すぐに大学に向かった。休日出勤中にもかかわらず、チェルノブイリ以後のいろんな土壌汚染に関する教科書をすでに探してくれており、それをその場で1時間かけて読んでレクチャーしてもらった。

「どうしてもコピーが欲しい。持つて帰って皆に見せたい。」

ネット環境が充実しているといっても、その教科書の購入には結構時間がかかる。だからこそお願いした。コピー機さえ貸してくれれば自分でやるつもりだったが、専属の秘書さんがさらに1時間くら

いかけてコピーしてくれた。「今度僕たちが日本に行ったら合気道の道場とか色々案内してくれたり良いよ。」とにっこり笑ってくれたときは、ちょっと感動して泣きそうになった。

他にもいろいろな人との出会いがあり、沢山の人々に協力頂いて、現在の福島震災関係の研究を続けている自分がある。今回は、きっかけとなる話を紹介させて頂いた。



知人と飯館村にて

ドイツ企業に勤めて改めて気付いたこと

神澤 太郎

(平18年卒)



筆者ドイツ・エアランゲン出張にて

筆者は電気電子工学科に入学したものの、理数系分野への才能の欠如からエンジニアの道を諦め、新卒で日系の戦略コンサルティング会社に入社、日系の製造業をクライアントにコンサルティングサービスを行いました。現在はドイツの老舗重電メーカーの日本法人に勤務しており、今のところ、洛友会ではやや外れ値のキャリアだと思えます。日本企業とドイツ企業のサンプルとしては、それぞれ1しかありませんが、筆者が感じた日独の考え方の違い、仕事の進め方や文化の違いなどについて述べたいと思います。

筆者が現在の会社に入社して始めに驚いたのは、会社のConstitution(憲法)と呼ばれる制度を定めた十ページ程の文書だ。これには、各国の責任者の権限などが事細かに書かれているのだが、そこには

以下のような文章があった。
Responsibilities are assigned to individuals who are personally responsible. Decisions are made by these individuals, not by committees.

つまり責任は一人の人間に帰するものであり、決断を下すのは会議体ではないと明確に記されているのだ。日本企業ではここまで明確に断言するのは、逆に難しいのではないだろうかと感じた。人の責任に関する考え方については、ドイツ企業に限らず欧米の企業では迎り前だが、個々人の責任範囲を非常に明確に定義する（もちろん兼務は存在する）。そして、その全てが機能（ファンクション）毎に、ヘッドカウントという数字で管理される。そのため、人を一人採用するにしても、なぜそのポジションが必要で何をするのが極めて重要になり、本社とのネゴシエーションや握りが必須になる。ただ一方で、だから「Know Who」を大切に。自分の職責範囲外の情報を得るには、他部門にも社内人脈を作っておかないと情報が入って来ない。この点は意外に泥臭いと感じた点だ。

次に会社の戦略や大きな方向性構築のアプローチの違いだが、ドイツではまずブランドデザインを設計し、それを精緻に詰めるやり

方を好んでいるようだ。実行にあたっては事前に完全にアクションリストを作成し、各リージョンの責任者を含む巨大なマトリックスを作る。会社の大方針が決まりトップがゴーを出せば、現場含めて基本的には粛々とやり切る（マトリックスを埋める、アクションアイテムを消し込む）。時々、中国やアメリカがドイツ本社の意向に沿わない動きを見せることもあろうだが、大方針には何とか従わせているように見える。また、前述のように最終責任をとる人物がはっきりしているため、新しいトップは平気で前任者の活動を否定できる。事業本部制 vs. セクター制、リージョン制 vs. リード国制などの大きな変更も1年単位で大改革ができる。さらに責任範囲や業務範囲が明確なので、戦略方針に沿わない事業部門を丸ごと切り出すことも簡単にやっつけてける。

次に一企業レベルではなく、最近流行の第4次産業革命のアプローチについて、日独米を比較したい。まず、アメリカはGEを旗手とするIndustrial Internetを推進しているが、国としてのアプローチは非常にシンプルドと思う。つまり、政府は競争やイノベーションが起りやすくなるように仕組みを提供するのみで、後は産業界によりしくやっつけてくれ、とい

うアプローチだ。そしてビッグデータを聞いたサービスや新しい製品開発等、どちらかと言うと製造より開発・サービスに軸足があるように見える。一方でドイツは、やはり枠組みや全体観、そして製造を大切にしていると感じる。まず、Industrial IoTという時代の変化について、革命(Revolution)ではなく発展(Evolution)であると位置づけて、自身でコントロールしようとしているように見える。

この変化に対して、産学官が連携し、さらにメカ・エレキ・通信の関連業界団体が協同してアジェンダを詰めて推進している。これも仕組みをきちんと詰めて、着実に物事を前に進めることを好むドイツ人気質ではないだろうか。そして製造を明確に自身の守るべき（こだわるべき）強みととらえ、地に足のついた製造業の未来を考えようというスタンスだ。一方で我が邦に目を向けると、第四次産業革命について現状まだ外圧という認識が強いように感じる。現在のアプローチは、現状の改善を持ち寄りボトムアップで改善していきたいというような、ドイツとは逆のアプローチに思える。明治期に日本に初めて電灯会社設立された時、仕方がないとは言え、現在にも禍根を残す電力周波数のダブルスタンダードができてしまっ

た。今回の議論でも業界団体、各社の思惑が強過ぎて、船頭多くしての状況になりつつある。結果として、電力周波数の轍を踏み、世界の標準とかけ離れたスタンダードにならないか、国内で複数のスタンダードが出来てしまわないか日本人として不安を感じてしま

う。最後に、多くは言い古されているが、改めて感じる3つの日本の弱み(課題)について述べたい。1つ目はやはり、部分最適が非常に得意であるということ。個別の改善は得意、現状の細かい改善も得意、それは確かに強い現場力と言えるが、その前提となる環境が変わると全く対応出来ず場当たり対応になってしまふ。長時間労働に裏打ちされた現場力だけでは、韓国企業とのガチンコ長時間労働勝負ではさすがにじり貧になってしまう。2つ目は、過剰なこだわりと職人気質。日本人の美德でもあるが、なんでも「道」と捉えて究めたくなる。しかし、そのこだわり(特に社内のこだわり)は本当にお客様にとって必要なのだろうか。社内システムをゼロスタートで自分仕様にする必要があるのだろうか。今後、グローバル化・外国企業との協業を進める上で、このこだわりは大きな障害にもなりかねない。必要なこだわり

強みを的確に把握することが重要だろう。最後は、実はかなり面倒くさがりであるということ。継続して考え続けること、大きな変化や痛みを伴うことに対処することが苦手で、すぐに仕方ないと諦める、神風が吹くか状況が変わるのを待つ癖があると思う。右肩上がりでもない、お手本も先生(欧米)もない、不確実性はどんどん上がる、という状況では、これはリスクでしかない。わかっちゃいるけどやめられない、明日は明日の風が吹く気質は、日本と日本人にとって実は相当深い病巣だと感じる。

以上、長々と大先輩方の前で偉そうに講釈を垂れてしまふ非常に恐縮です。しかし、高度経済成長も人口が増える感覚もバブルも知らない世代が、つまり変な成功体験もしがらみも少なく自由に考えられる世代が、粘り強く信念を持って、変えるべきところは変えて行かなければならないと強く感じています。

医療なら日本？

泉 泰一郎

(昭61年卒)

海外で医療機関にかかったことはありませんか？言葉の不安もさることながら、日本とはまるで違う医療システムに面食らった方も多いでしょう。それは医療にかかわる人々や患者、家族の間の責任分担の違いとみることもできるのではないかと思えます。私の経験からいくつか紹介したいと思えます。

95年に企業派遣留学でカリフォルニアに渡りました。一歳になったばかりの長男は喘息持ちでしたし、予防接種もお願いしないといけなかったので、渡米後すぐに留学先のサポートセンターで小児科医を紹介してもらいました。当地ではホームドクター制がシステムとして確立しています。普段はホームドクターのクリニック(病院)で診察を受け、ホームドクターにはできない検査や手に負えない病気の場合には、ホスピタル(病院)が紹介される仕組みです。緊急でない限り、ホームドクターの紹介状なしにホスピタルに行くことはありません。

では、風邪をひいたらクリニックに直行すれば良いかというと、そうでもありません。まず電話で

ナースに症状を説明し、一次措置を指示してもらいます。これにはお金は一切かかりません。家庭では手に負えないと判断されたときだけ、来院が指示されます。医療費を抑えるとともに、混雑や無用な感染を避けるためでしょう。熱であれば39℃を超えるくらいの高熱が続かないと来院指示にはなりません。

ナースの指示は一風変わっていて、日本ほどやわではありません。下痢には、「気の流れを良くして、下痢は止めないで、辛くても我慢して悪いものを排出させるのが当地の流儀です。実際、ドラッグストアで下痢止めを探したのですが、当時は見つけれませんでした。しかしそのままでは脱水症状を起こしてしまうので、「糖分のある水」を飲ませるので、「糖分のある水」を飲ませるのです。熱には、「Tylenol(市販の解熱剤)を飲ませて寝かせなさい。」バスタブに氷水を張って体ごと冷やしながらと言われたこともありました。下痢が収まるか、熱が下がったらそれでおしまい、クリニックに行くことはありません。家庭で済ませられることは家庭で、ということが徹底していました。

99年には長女の出産に立ち会いました。出産での医療はさらに細かく分業されており、妊娠がわか

ると、産婦人科医、分娩病院、カウンセラー、そして小児科医による連携プレー体制が構築されます。

出産までは産婦人科医のクリニックに通って診察を受けます。クリニックには分娩設備はありません。いざ出産となったら、クリニックの先生が施設の整った別の病院に向いて、赤ちゃんを取り上げてくれるのです。病院ではその他、出産に備えた夫婦そろっての見学会とカウンセリングが行われます。出産後、病院には一泊だけして退院し、後は、赤ちゃんは小児科医のクリニックへ、母親は産婦人科医のクリニックへと引き継がれます。医療費が高いので保険では何泊もカバーされませんし、この病院では年間3,000件もの出産があるので、回転数を上げねば捌けないでしょう。何事も合理的に行われます。

さて、日本では出産に夫が立ち会いかどうかはまだオプションになっているようですが、かの地では当時からデフォルトです。立ち会いかどうかは聞かれもしません。お産に立ち会ったら、父親は、へその緒を切ったばかりの赤ちゃんと一緒にナースに包まれて写真撮影に向かいます。スワドルというおくるみに赤ちゃんを包み、キュービーのようなヘアスタ

イルにして赤ちゃんの写真を撮ります。スワドルはこちらが心配になるくらい、ぎゅっと締め付けます。母親の胎内にいる格好にすることで赤ちゃんが安心するのだということでした。

時は下って今年の3月のこと。同僚が出張先の上海で倒れて頭部を損傷、緊急手術で一命は取り留めたとの連絡が入り、サポートのため即日上海に向かいました。

病院は見た目、日本のものと変わりありません。しかし、たくさんの人でごった返しています。日本の病院との一番の違いはここです。日本でも、診察や処方箋を待っている患者さんがロビーで大勢溜まっていることはありがちですが、そうではなくて、病院の中も

外も、いつてみれば新宿駅の雑踏のような感じなのです。これは入院患者の見舞いや介護のために訪れる家族や親類が多いからだとして知りました。中国では医師と看護師による診察や治療の範囲に介護的な行為が含まれないので、家族総出で介護するのが普通だそうです。例えば、病室からCT撮影室への移動や撮影台に患者を載せることすら、家族の仕事です。したがって、病院の周りにはそういう家族が食事をするお粥屋などがたくさん並んでいます。間に混じって何軒か葬儀屋さんもあり、

ちょっとした文化の違いも感じました。

日本のように病院にお任せというわけにはいかない、文化が違うということ、同僚の介護をどうするか、どうしたら早く日本に戻せるかなど、素人には重い課題が山積みになりました。助けてくれたのは、会社が契約している医療サポート会社でした。このスタッフが、通訳(病院で英語はほとんど通じません)、医師との交渉や支払い関係の手続き、介護ヘルパーの契約などの一切を取り仕切ってくれました。

医療サポートがなければ、医師や病院とのコミュニケーションをとるのは難しかったことでしょう。また、保険は当然掛けているにしても、入院した本人に意識があるとは限りませんから、どんな保険をどれだけ掛けているかの情報の共有が重要です。会社で調べればわかることなのですが、出張前には個人契約分も含めてあらかじめ整理しておき、上司や家族にはすぐわかるようにしておきましょう。なお、決して当地の医師や看護師が冷たいというわけではありませんので念のため。慣れない外国で不安だろうと、それは丁寧に親切に対応いただきました。

海外での医療を経験すると、慣れ親しんだ日本の医療制度は楽で

安心だと感じます。しかし、お任せの医療にはそれなりのコストがかかっているはず。優れた医療でありつつ、無駄を省いた合理的な医療というものを、我々利用する側がもっと意識すべきではないかと思いました。

彦根藩窯湖東焼

山本 勇三

(昭41年卒)

江戸時代の末期19世紀に入り、日本国内でも焼き物、特に磁器が庶民の生活に浸透し始めたころ、各地に現在藩窯と呼ばれている、藩が経営を主導した窯業が生まれた。譜代筆頭と言われて、30万石の知行を有した彦根藩も例外ではない。今日「湖東焼」と呼ばれ、愛好家が眼の色を変える陶磁器がそれである。伝世するものが少なくしばしば「幻の…」と形容されることも多い。それを追っかけて30年近くになるが、今回良機を与えられたので、少し紹介をさせていただきます。

湖東焼は藩窯として当時から名声を博したが、その歴史は最初から最後まで藩窯として活動したわけではない。文政12年城下の古着商絹屋半兵衛が開窯したものであり、天保13年9月、大老職を辞して彦根に帰城した第14代藩主直亮

侯がこれを召上げ藩窯とした。続く15代直弼侯、16代直憲侯を経て、文久2年閏8月、同窯の職人であった山口喜平ら4名に払い下げられ、また民窯に戻った。ほどなく喜平単独の事業となり、次第に日用品の陶器などを専ら焼きだてるも明治28年喜平の死をもって途絶した。湖東焼は以上3期に大別できる。今日、美術品、骨董品として鑑賞されるのは藩窯期約20年間とその前後各10年程度の計40年くらいの間の製品とみてよいのではないかと思う。以下それぞれについてもう少し詳しく述べてみたい。

(1) 絹屋窯 (文政12年10月〜天保13年9月) (1829年〜1842年)

当時彦根城下は名古屋と京都の間では最も大きな町であり、半兵衛は手広く事業を営んでおり、古着の仕入れのためしばしば京都を訪れそのたびに清水の観音様にお参りし、京焼の盛んなことも知っていたようである。しかし藩内には陶磁器の製造はなく、輸入に頼っていた。そこで有田出身の陶工と出会い、窯業への進出を決意したといわれている。初窯は失敗したが、翌年には焼成に成功し、藩主の注文を受けるまでになった。天保5年には瀬戸風に窯を変更した。瀬戸からの職人を雇

い入れたものと思える。これ以降湖東焼は瀬戸の影響を強く受けることになる。しかし経営は苦しかったらしく、天保5年と同12年に藩から借銀をしている。その間、半兵衛は地元窯土や釉薬用の土を発見し、これらを使用する道を開いたが、製品コストが高く、すでに量産体制を確立していた伊万里、瀬戸、信楽などからの輸入製品に価格ではかなわなかったようである。

製品は染付の磁器が主体であったがこの時期の製品と断定できるものは少ない。筆者の手に寿老人を描いた染付の筆筒が1点ある。その糸底には「文政十三年庚寅十一月下旬調／湖東新焼／玄翁斎〇〇」と墨書されている。これは成功した最初の窯の製品だと判断しているが、やや粗く青味を帯びた釉薬がかかり、濃い呉須で寿老人を大変上手く描いている。

(2) 藩窯 (天保13年9月〜文久2年閏8月) (1842年〜1862年)

天保13年、第11代將軍家斉公の治世下で大老を務めた第12代藩主直亮侯は久しぶりに帰国し、この絹屋の窯を召上げて藩窯とした。趣味人でもあった直亮侯はこの窯を幕閣や藩主たちへの贈答品を焼く最高のお庭焼

にするとともに、当時国内のあちこちで始まっていた殖産興業的な窯として、藩内の陶磁器需要を賄い、さらには輸出をもくろんでの召上げであったようだ。このころの製品は染付、金欄手など優品が多い。また、弘化、嘉永のころ幸斎、鳴鳳といった絵付師が城下に滞在し、上絵付の御用を承った。藩庁からの注文も多かったらしく、逸品が残されている。お庭焼きの要素が強かったであろう。また、必ずしも「湖東」銘ではなく、「金亀山東」や「金亀城東」銘がある。

これは彦根城が築かれているのが金亀山であり、窯場はその東に位置する、石田三成侯の旧城址である佐和山のふもとにあったからである。

第13代藩主直弼侯は長い部屋住み時代から楽焼きや茶道などに親しみ、焼き物にも造詣が深かった。藩主になるやただちに技術革新、窯場の増設、職人の増員など、積極策に取り組み、従来の丸窯に加え、古窯や土焼窯が築かれ湖東焼は全盛期を迎え、ブランドも確立してきた。銘も「湖東」に統一するよう指示したが無銘品も多い。染付、赤絵金彩にとどまらず、各種色絵、瑠璃釉、青磁に加え古九谷、仁清などの京焼、安南、瀬戸、

織部、万古などの写しもの等各種各様の陶技をいまに伝えている。また、安政の初めころ藩窯などから素地を買って入れて、自宅で上絵付のみを行って主として中山道を通る旅人に販売して好評を博した人たちがいて、安政4年に藩からその独占権を与えられた。赤水、自然斎、床山、賢友の4人である。これを民業赤絵湖東焼と呼んで、藩窯とは区別している。

安政7年3月3日、直弼侯が江戸城桜田門外で水戸の浪士たちに暗殺された後、藩窯の存廃も大いに議論され、世を見るに敏い職人たちの何人かは職を辞してそれぞれの道を歩んだが、それでもまだ直憲侯治世下に約2年間腕の立つ職人たちが居残り、皇女和宮と第14代將軍家茂公のご婚儀が済ませられた、ご祝儀の御使として直憲侯に幕府から御所へ参内すべき内命があった時、公家ははじめ、諸家への進物として湖東焼が用意された。箱書きに「彦根中將拜領／陶器湖東焼」と墨書された染付の柳に水鳥図釣瓶形花活一対が伝世されているが、これはその時の進物が今に伝えられたものであると私考している。しかし、文久2年ついに藩窯は閉鎖され

た。3代約20年間であったが、最狭義の湖東焼はこれであり、非常な佳品を世に出した。

(3) 山口窯(文久2年〜明治28年)(1862年〜1895年)

藩窯閉鎖後、窯場は有り姿のまま、山口喜平ら4人に払い下げられた。4人とも藩窯時代、扶持を受けた良工だったので変りない製品が出荷されたと思われるが、資本の違いはいかんともしがたく、やがて喜平以外の3人が去り、明治28年、途絶する。その間約33年であるが、湖東焼としての特色が見て取れるのは明治10年ころまでの製品である。

「湖山人生写」との銘がある竹に岩を描いた染付の筆筒がある。この銘は明治7年ころに山口窯で使用されたものであることが分かつているが、絵付けはペロ藍(ベルリンブルー・化学コバルト)を少し薄めたような鮮やかな青色で為されている。

湖東焼に最も理解のあった直柄侯の不慮の死、明治維新など時代の激変に遭遇したとはいえ、窯業は湖東、湖北の地には根付かなかつた。しかし藩窯閉鎖後、幹山伝七等の有力陶工は京都へ向かい、京焼の近代化に大いに貢献した。現在に至るも窯業を守っている陶家も何軒かある。

追記

今回41年卒に原稿を事務局から依頼されましたので、評議員の今中、更家さんと相談し、湖東焼を長年にわたって研究し、本まで出している山本勇三さんをお願いすることにしました。

山本さんは8月9日に私にメールで草稿を送ってくれ、もう少し手を加えるからと書いていましたので、それを待っていたところ、8月29日に今中さんからの電話で山本さんが急に亡くなられたとの悲しい知らせを受けました。

私はお葬式に参列した時、奥様とご子息に洛友会会報にお出ししてよいかをお訊ねし、ご了解を得ましたので、最終稿ではありませんが山本勇三さんの遺稿として、掲載させていただきます。

竹原 壽良 記(昭41年卒)



支部だより
中国支部総会報告

平成27年5月29日(金) ANAKU ラウンプラザホテル広島において第62回目となる平成27年度洛友会中国支部総会が開催されました。

総会には教室から引原先生をお迎えし、中国地方各地から22名の会員のご参加をいただきました。

総会は、開会にあたり松井支部長から挨拶をいただき、引き続いて支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員の改選案



について説明・提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて引原先生から洛友会本部の近況および大学の近況についてお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、昭和38年卒業の田中先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、昭和28年卒業の池内先輩のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

平岡 正憲(平10年卒) 記

九州支部総会報告

平成27年5月29日(金)、福岡市天神の福岡国際ホールにて、平成27年度九州支部総会を開催しました。本部から幹事長の荒木先生をお迎えし、九州支部からは主に福岡在住の会員15名が出席しました。

当日はまず総会に先立ち、当支部恒例のカクテルパーティーを今年も催しました。このパーティーは、総会開始30分前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するというものです。パーティー開始時には出席予定者

全員が集まり、総会開始前から早くも盛り上がっていました。

総会は深堀支部長の挨拶で始まり、昨年度は予定通りに昼食会、懇親会を行い盛況だったことなどについて述べられました。

引き続き、本部幹事長の荒木先生から挨拶をいただき、洛友会本部の動向についてお話を伺いました。

更に、荒木先生からは、ご用意頂いた資料を用いて、京都大学や洛友会の現況などについてご紹介を頂きました。出席者からも盛んに質問が出て、大いに盛り上がりました。

その後、能見監事、池田会計監事から平成26年度活動実績・会計の報告及び平成27年度活動計画の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、増岡先輩(昭和21年卒)の乾杯の音頭で始まり、参加者全員お酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。また、今年年度九州電力に入社した九州支部の会員になった久保祐樹さん(平成25年卒)の自己紹介や昨年度発足した京都大学福岡同窓会(全ての学部の同窓生が対象)が平成27年11月21日(土)に京都大学の山極総長を講師としてお迎えし、講演会(一般の人も参加可)

及び同窓会を開催することなどの紹介がありました。

楽しいひとときもあつという間に過ぎ、深堀支部長の音頭により懇親会を締めくくり、最後に全員で記念撮影をしてお開きとなりました。

池田 茂雄(平7年卒)記



北海道支部総会報告

去る5月31日(日)18時より札幌市内のホテルモントレーエーデルホフ札幌にて平成27年度北海道支部総会を開催しました。

今回も9名と少人数となりましたが、初めてのご出席となる方を2名迎えての開催となりました。

最初に、澤井支部長より、支部総会をつなぐの場として2名の新たなメンバーとお会いできて大変喜ばしいこと、また、同期会で京都を訪れた際の神護寺のご様子や西明寺と京都大学とのつながりについてご紹介いただくなどご挨拶をいただきました。なお、昨年度の支部総会で、本部からご参加いただいたことが大変有意義であったため、状況変化などを考慮し、来年より隔年で本部からのご参加の依頼を検討することとしました。

続いて幹事より前年度会計報告、今年度予算案をご説明し、現役員体制の継続を含めて承認いただきました。

この後、澤井支部長のご発声により、懇親会に移り恒例に従い会員の近況報告等を中心に話題を進めました。

この中では、現在のお仕事に関する話題や趣味、学生時代によく通った飲食店などについて歓談

し、懇親を深めました。

いつものことではありますが、予定していた時間はすぐに経過し、次回の再会を願いながら、記念写真撮影後お開きとしました。

北海道支部の支部総会は少人数での開催が続いているため、今後はこれまで参加されていない方のご出席をお待ちしています。

佐野 大輝(平16年卒)記



平成27年度 洛友会東京支部総会

平成27年6月28日(日)、学士会館にて、東京支部総会、本部総会、講演会及び懇親会を開催しました。本部より長尾会長、荒木幹事長、高岡幹事を初め多数の来賓

をお招きし、82名の参加をいただき、例年にも増しての盛会となりました。

支部総会は安田支部長の司会により、午後2時に始まりました。

古屋総務幹事より平成26年度行事・活動報告「第一号議案」があり、支部総会後の講演会では、京都大学元総長の松本絃様をお招きし、大変興味深いご講演をいただいたこと、その後の懇親会では長尾会長のご挨拶を初めとして、米寿、喜寿を迎えられた方の一言や、「琵琶湖周航の歌」合唱で大盛況であったこと、秋の講演会では「宇宙工学と宇宙政策の世界」探検する宇宙、危機あふれる宇宙、生活に密着した宇宙」と題し、京都大学生存圏研究所・同大学院工学研究科電気工学専攻(協力講座)の山川宏教授からご研究がご紹介されたこと、春の見学会では東京都三鷹市の国立天文台を訪問し、天文台の先端装置や基盤技術、4次元デジタル宇宙シミュレーションなど充実した内容であったこと、3月の若手勉強会では株式会社アーキの中野哲浩様をお招きして「エンジニア出身経営者の製造企業改革の軌跡」と題して、ご講演をいただきました。また、5つの趣味の会、6つの拡大クラス会の状況について報告があり、拍手をもって

承認されました。

続いて、平成26年度決算報告および監査報告「第二号議案」があり、ほぼ予算計画通りの決算となったことが田邊会計幹事より説明されました。この決算内容に対し、小森監事から適正に会計処理され決算報告に記載されていると監査報告が行われ、決算報告および監査報告は拍手をもって承認されました。

次に、平成27年度の役員/幹事「第三号議案」の提案が行われました。平成27年度の新役員/新幹事は、支部長 成宮憲一(S49卒)、副支部長 小森光修(S50卒)、監事 真崎 義孝(S51卒)、総務幹事 田邊 義孝(H8卒)、会計幹事 福原忠行(H9卒)、庶務幹事 浅井孝浩(H7卒)、若手勉強会幹事 古屋裕規(H7卒)の7名となりました。また、空席だった学年幹事を5名追加したこと、評議員では複数名からご辞退をいただいたこと、拡大クラス会では五九洛会とみとおし会が活動終了となったことをご報告し、拍手をもって承認されました。

安田支部長から退任の挨拶がありました。「グローバルな形で洛友会がお役に立てるように、若手の人にも参加してもらうことを目的」として企画に取り組んできました結果、少しずつ多くの若手に参加をしてもらえるようになってき



安田支部長



成宮新支部長

ました。更に多くの若手に参加して頂いて、全体として洛友会の活動が活発になるように本部の副会長として引き続きサポートさせていただきます。講演会・見学会については、この1年「宇宙」にテーマを絞って企画してきましたが、今後も活動を活性化していただきたい」との語がありました。

引き続き、成宮新支部長から就任の挨拶がありました。「若手の横の連携・つながりを作って、洛友会に参加していただくことを考えています。特に20代の人に参加してもらえようようにしていきたい。今年の秋の講演会では、京都大学大学院生命科学研究所の米原伸教授に「生命科学」というテーマで講演をお願いしています。若手交流会では、経営者の方から話を聞きたいという若手のご要望に

お応えし、元NTTデータ社長の浜口友一様(S42卒)に講演をお願いしています。」との語がありました。

次に、田邊新総務幹事から、平成27年度行事・活動計画「第四号議案」について説明を行いました。例年通り、秋の講演会、若手交流会、春の見学会などの行事、拡大クラス会・趣味の会を実施すると共に、登録会員数向上、若手活性化施策、全学同窓会活動との連携を検討していくこと、などが説明され、拍手をもって承認されました。更に、平成27年度予算計画「第五号議案」が説明され、拍手をもって承認されました。

その後、平成27年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿1名、喜寿5名)に対し、大きな拍手と共に会場より祝意が表されました。

た。

以上をもって、平成26年度洛友会東京支部総会は閉会となりました。

本部総会を挟んだ後、16時より講演会となりました。「宇宙・人文学への招待」と題して、京都大学・宇宙総合学研究所ユニット特任教授の中野不二男先生からご講演いただきました。

ご講演内容

3月31日までJAXAにいたが、松本元総長からいろいろやってみないかということ、宇宙人文学を始めました。宇宙人文学は宇宙人の文学ではなく、宇宙の技術と人文学を融合させるのが目的で、日本の古典文学や古文書などの記述を衛星からのデータで解明



中野 不二男 先生

して、700kmの距離から古事記を探るというテーマです。日本の古典文学や古文書などの記述を、JAXAが上げたALOSから得られた地形データから分析します。

地球観測衛星であるALOS(陸域観測技術衛星「だいち」)で取得される観測データは電波の波長の違いによって見え方が変わります。RESTOCというシステムがあると、これらの観測データを基に立体地図を書くことができます。

日本書紀・古事記には災害に対する事績が書かれています。古事記は、天武天皇が天皇の系譜と世の中の出来事を、神話として構成するように稗田阿礼に伝えたものです。「島になる おのころじま」

は「海に漂う国々の」「潮が固まって国になる」と記述されています。そこに出てくる「淡路のしま」「伊予のしま」は淡路島と四国ですが、おのころじまだけが実在が不明です。そこで、立体地図を作って、水面を上昇させて島を推定しました。古事記に出てくる難波津、住吉津、紀水門(きのみなど)は海の近くにあったはずですが、住吉津は海外から来た船の一時係留港でした。難波津は、現在の大阪の地形で海面をバーチャルに上昇させたときの海岸付近に

あたる高麗橋と、安政大地震の被災地図面で大津波が最も奥深くまで達した地点と、3つの時代を超えて一致することが分かりました。紀水門は四国に行くための出発地です。和歌浦にある玉津島神社の周辺の水面を下げる(周辺の地形を隆起させる)と、沖合いが島だらけになりました。これらの島々が古事記にある「様々な国」にあたるのではないのでしょうか。684年の地震が日本書紀に非常に細かく書かれています。11年間に17回の地震があり、この時、地面が隆起して、淡路島の南側の中央構造線上に沼島ができた可能性があり、これが「おのころ島」ではないかと思えます。

現在の地形を傾けたり回転させたり、水面を上昇させたりすると昔の地形を再現できる可能性があります。例えば、更級日記にある記述を基に、江ノ島付近の海面を、貝塚の場所を基に水面の位置を変えると、昔の地形は相当北まで海が広がっていたと予想しています。ここまでは、標高データを基に調査したものです。ALOSの近赤外データを使うと植物のクロロフィルを調べることが出来ます。これを使えば植物の発育状況が分かります。

高校生のテーマとしていろいろな研究をしてもらっています。日



講演の様子

本全国にある縄文時代の貝塚の高
度が違うので、そこから昔の海水
面を推定したり、羽柴秀吉の備中
高松城の城攻めが本当にできるか
を確認したり、「これより下に家
を建てるな」という碑を基にどの
ような津波の浸水になるかをシ
ミュレートすることが出来ました。
このように衛星から得られる情
報で様々な現象をシミュレートす
ることが可能となります。

午後5時より、恒例の懇親会に
移りました。懇親会は、成宮新支
部長の開会のご挨拶のあと、長尾
会長のご挨拶と杯のご発声が始ま
り、例年にも増して、幅広い年齢
層にわたる多彩な参加者の交流の
場となりました。会員の方々の活
発な意見交換が行われました。趣
味の会幹事の方から各会のご紹

介、米寿・喜寿を迎えられた方か
ら一言を頂いた後、福原新会計幹
事の音頭により、恒例の「洛友会
の歌」及び「琵琶湖周航の歌」を
合唱しました。最後に、小森新副
支部長の中締めにより、午後18時
30分に散会となりました。

総務幹事 田邊 義孝
(平8年卒) 記



琵琶湖周航の歌斉唱

中国支部 第18回ゴルフコンペ

中国支部では、平成27年5月30
日(土) 広島佐伯カントリー倶楽
部(広島県廿日市市)にて第18回
ゴルフコンペを開催しました。

年1回の恒例行事となっている
当ゴルフコンペも今回で18回目と
なりました。昨年は、皆さまの都
合が合わず、残念ながら開催を見
送ることとなりましたが、今年は
5名ではあるものの何とか開催す
ることができました。

大会当日は、午後からは雨の中
のプレーとなりましたが、5名の
参加者は優勝を目指して真剣に、
かつ楽しく和やかにプレーを満喫
でき、プレー後の表彰式を兼ねた
懇親会でも大いに盛り上がりまし
た。

今回の優勝者は、大変惜越なが
ら、筆者がグロス、ネットともトッ
プとなり、7回目の参加にして初
めて優勝することができました。
第2位は今回の参加者の中で最高
齢ながら堅実なプレーをされた井
上靖彦氏(昭和36年卒)、第3位
はグロスでは第2位の支部長松井
三生氏(昭和45年卒)でした。また、
その他の参加者も、ニアピン賞、
ドラコン賞等を獲得し、大変充実
した大会となりました。

当支部のゴルフコンペは、年々

第10回京都大学ホームカミングデーの開催

京都大学同窓会が発足して10年目を迎え、節目となる第10回京都大学
ホームカミングデーを、平成27年11月7日(土)に「心」をテーマとし
て開催します。

第10回の特別記念として、百周年時計台記念館百周年記念ホールにお
いて、日本文学研究者(文化勲章受章)の دونالد・キーン博士に「京
都大学時代に出会った人々」と題した講演をしていただきます。また、
医学部茶道部によるお点前を裏千家業躰(ぎょうてい)部の解説付きで
見ていただきます。

洛友会会員の皆様におかれましては、ご家族、ご友人をお誘い合わせ
の上ご参加くださいますようお願いいたします。

申し込みなど、詳しくは京都大学同窓会ホームページ ([http://hp.
alumni.kyoto-u.ac.jp/](http://hp alumni.kyoto-u.ac.jp/)) をご覧願います。

日時 平成27年11月7日(土)
場所 《メイン会場》 京都大学百周年時計台記念館

1. 講演会 10:00～11:35
 - ① 挨拶・山極壽一総長(京都大学同窓会会長)
 - ② 京都大学観世会による能(仕舞)の披露
特別記念講演
 - ③ 講師 日本文学研究者(文化勲章受章) Donald・キーン博士
 - ④ 医学部茶道部によるお点前の披露
2. くすのき茶会 12:00～13:00
 - ① 手まり寿司とお抹茶
 - ② 京料理・六盛の特製弁当とお抹茶とお菓子を味わう
- ・ 京都・先斗町(ほんとちよう)の舞妓の舞
- ・ 会費一人2,000円
3. クスノキ屋台村 11:00～17:00
4. 野点 11:00～15:00
5. 音楽会 13:15～14:35
 - ・ 京都大学交響楽団の演奏/京大合唱団同窓会の合唱
6. 京大生のキャリア形成を考える交流イベント 15:00～18:00
7. 総合博物館 特別展
テーマ「研究を考えるデザイン」
8. 施設見学 10:00～16:00
・ 尊攘堂、附属図書館



参加者が少なくなっている状況にあります。恒例行事としてさらに充実していきたいと考えていますので、多数ご参加いただきませうようよろしくお願いいたします。

達田 政志 (平成12年卒) 記

編集後記

10月の会報をお届けします。今号も多数の寄稿を頂き、お陰様で豊富な内容となりました。特に長年のご経験に基づく職業観や人生観にあふれる記事が多く、ぜひ若い会員の皆様、とりわけ学生会員の諸君に熟読頂ければ、同窓会の存在意義を高めることにも貢献するものと思えます。

電気電子工学科では、平成10年度から、一人の教員が各学年4名程度の学生を担当し、入学から研究室配属までの間指導するアドバイザー制度を置いています。

少なくとも前期と後期の初めに科目履修登録をする際には、必ずアドバイザーの承認を得ること、という制度で、大方の学生はその時期にだけ「はんど下さい」とやって来ます。家庭医と同じで、久しぶりに顔を見て、元気にやっていたらそれでよいのですが、事前に送られてくる成績表を見てこれは危ないな、と思う学生は、やはりたいいてい暗い顔で現れます。あれこれ事情を聴いて、生活習慣の改善を指導して、ひと月後にもう一度、とまるで人間ドックの担当医のようなことを言うのみで、なかなか人生に目的を与えるような助言ができる訳ではありません。

最近、受験教育の効率化が進み、大学合格が自己目的化して、入学すると目標を見失ってしまう学生も少なくないように思います。

本号でご案内の通り、11月6日には恒例の電気系教室懇話会が開催されます。諸先輩にはぜひふるってご参加頂き、学生諸君とエンジニアとしての一生について熱いご議論を頂ければ幸いです。

訃報

昭21	藤間 豪一	27・8・15
昭23	河越 義博	27・7・17
昭25	橋本 吉昭	27・9・23
昭25	山口 四郎	27・8・2
昭26	柴田 宏	27・8・15
昭27	辻野 昭夫	27・8・23
昭28	佐藤 和夫	24・3・3
昭28	高橋 正	27・7・2
昭28	卯本 重郎	27・7・29
昭41	山本 勇三	27・8・26
昭51	枝松 寿一	

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

CUE No.34 発行のお知らせ

cue (電気関係教室技術情報誌) No.34が発行されました。目次は以下の通りです。内容は、HPにも掲載されますのでこちらでもご覧下さい。

<http://www.sei.kyoto-u.ac.jp/ja/information/cue/>

巻頭言

「最近のエネルギー情勢について」

大引 得弘

大学の研究・動向

「第5世代ブロードバンド移動通信システムに関する研究」

デジタル通信分野

産業界の技術動向

「企業のダイバーシティと技術者のキャリアパス」

齊藤 ゆみ

研究室紹介

平成26年度修士論文テーマ紹介

高校生のページ

白石 誠司、江口 学

「磁石とスピントロニクス」

学生の声

長崎 陽
山岸 裕史

教室通信

「デザイン学大学院連携プログラム」

黒橋 禎夫

編集後記